

# ジルベール・シモンドンの個体化論における 伝統的個体観への批判について

堀 江 郁 智

## 1 はじめに

本稿では、フランスの哲学者ジルベール・シモンドン（1924-1989）による伝統的個体観、つまり原子論的実体論 *substantialisme atomiste* と質料形相論 *hylémorphisme* に対する批判的読解の内実を明らかにする。この検討を進めるに当たり重要な参照項となるのが、博士主論文『形相と情報の概念に照合された個体化』*L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information*<sup>1</sup>（以下 ILFI と略記）に付記された補論「個体の概念の歴史」*Histoire de la notion de l'individu*<sup>2</sup>（以下 HNI と略記）である。国内外の先行研究を通じて取り上げられる機会の少なかった HNI を俎上に載せることで、シモンドンの個体化論が両伝統的個体観に対して行った位置取りとその批判的乗り越えの身振りを綿密に測定することが可能になる。

シモンドンによる原子論的実体論と質料形相論に対する批判内容を検討した数少ない先行研究としては、L. Duhem の単論文「アペイロンとピュシス。前ソクラテス派の変調器シモンドン」*Apeiron et physis. Simondon transducteur des présocratiques*<sup>3</sup>がある。Duhem によれば、個体の概念の哲学史を扱ったシモンドンの著作は HNI と『知覚講義』*Cours sur la perception*<sup>4</sup>の第一部に限られるが、両著作とも「哲学の歴史の真の哲学」が練り上げられたという点で特筆される<sup>5</sup>。さらに、HNI については「とりわけ個体化論考案の支持体であり活力であるアペイロンとピュシスの反省的ポテンシャルを明かす」と評価する<sup>6</sup>。しかし、こうした評価にもかかわらず、Duhem の論述の枠組みから漏れ出ている視点があるとすれば、このアペイロンとピュシスを含めた古代ギリシャ・ローマ期の哲学の概念をシモンドンがいかなる姿勢で読み解いたのかを明らかにする視点である。本稿は、この視点から ILFI と HNI を取り上げてシモンドン研究に対する寄与を行いたい。

## 2 原子論的実体論へのシモンドンの批判

まず、本章では、シモンドンによる原子論的実体論への批判の具体的な過程を追跡していく。ただし、その前に「原子論的実体論」という独自の用語の含意について確認する必要がある。ILFI序論では、「実体論」を修飾する用語として「原子論的」という形容詞が採用されている。では、「実体論」という名詞に「原子論的」という形容詞が付加されることで、何が言われようとしているのだろうか。差し当たって考えられるのは、(1) シモンドンは原子論のみに当てはまるような批判を展開するのではないということ、そして(2) シモンドンは原子論のなかに実体論的な側面を見出していることである。

周知のように、哲学史において「実体論」と「原子論」という用語は相異なる内容の学説を指し示している。それゆえ、シモンドンの論述は、時として「実体論」・「原子論」・「原子論的実体論」という3つの用語の配置をめぐる技術的な混乱が存在しているかのような印象を与える。しかし、ILFIを読み進めていくと分かるのは、シモンドンは3つの用語を無作為に混在させているというよりはむしろ、これらの用語によって互いに重複しつつもズレが介在するような3つの範囲を指し示していることである。つまり、このような用語の配置をめぐる不均衡は、シモンドンの技術的な混乱に由来するのではなく、シモンドンによる意図的な選択である可能性が高いと考えられる。

### 2.1 スパイロスからアトムへの「絶対的個体」観の引き継ぎ

したがって、まずもって、これら3つの用語が各々指示する範囲をより明瞭な輪郭をもって提示することに努めたい。差し当たって、このような用語の絡み合いを解くための鍵となると思われるのは、HNIにおける以下の記述である。

すなわち、レウキッポスとデモクリトスはエレア学派の存在を原子に鑄造していたとよく言われる。なぜなら彼らの学説において、原子（アトム）はめいめい、パルメニデスのスパイロス  $\Sigma\phi\alpha\iota\rho\omicron\varsigma$  と同じく絶対的個体 *individu absolu* という実体的な側面を有していたからである。そのことは、おそらく正しい<sup>7</sup>。

ここでは、パルメニデスのスパイロス（球形）を引き合いに出すことで、シモンドンはアトムの実体的な側面について言及している。周知のように、原子

論はその起源にパルメニデスの存在論への批判という側面を有しているのだった。シモンドンが原子論のアトムモデルに加えて、パルメニデスが提示した自己同一的な有の均等一様な実体のモデル、つまり球形（スパイロス）の実体のモデルまでをも批判対象とするということ——この点にこそ、ILFI序論導入部における記述の捻じれを説明する鍵があると思われる。

実のところ、シモンドンはパルメニデスに対して次のような文脈でも言及している。

有 [c]e qui est は、幾何学的な秩序から成る絶対であり、ヘラクレイトスにおける世界の秩序のように神々しいピュタゴラスの構造である。完全に静止したパルメニデスの球形は、絶対的個体 *individu absolu* を表象する。その個体は、理性的にしか思考されるはずはない、あるいは架空的にしか思い起こされるはずはないが、オピニオンの手段にしか応じない外部世界の現在の経験においては発見されえないだろう<sup>8</sup>。

すなわちこれらの箇所を通して、原子論が、パルメニデスの球形における「絶対的個体 *individu absolu*」という実体のモデルを、アトムの次元において再発見しているということが指摘される。パルメニデスの存在論と、レウキッポスとデモクリトスに始まる原子論という一見して対立し合う学説において、かたやスパイロス、かたやアトムという絶対的個体に基づいた概念構成の引き継ぎがあることをシモンドンの以上の記述は示唆している。個体化論の導入部における3つの用語の絡み合いを説明する要因が、ここに見出される。

## 2.2 原子論における実体論的な側面

このように、「原子論的実体論」という用語の「実体論」という名詞によって指示されるのは、パルメニデスの存在論に見られるような生成消滅を排除した自己完結的な統一性を有した実体に関する議論である。

シモンドンによれば、先述のようにパルメニデスは、イオニア学派の自然学を虚偽のオピニオンに基づいたものとして退けている。すなわち、イオニア学派におけるピュシスの過程の同質的な連続性は、パルメニデスにおいて棄却されている。シモンドンは、パルメニデスの存在論についてイオニア学派の自然学と対比させつつこう述べる。

[パルメニデスの概念構成において] 存在はその不分割とその最初の内部性において把握される。個性性は原初的である。個性性は部分なき存在 *l'être sans parties* の絶対であり、その球形の十全さにおいて完結している。[…] パルメニデスの統一性が存在するには、外的な無 *néant extérieur* が必要である。その統一性は、それ自体に対する構造の内部性であり、独力で自制し、生成されることのない部分なき全体の一貫性である。イオニアの自然学者において、生成は個別的な存在を、元素に内在するピュシス *physis immanente à l'élément* による産出物を、無際限な連続性における原初的な元素に結びつけるものであるのに対して、パルメニデスの存在にとって生成はない。エレア学派の存在はそれ自体にあり、分有もしないし前進もしない。それは元素もピュシスも想定しない。その統一性は、それ自体に完全に含まれた構造の統一性、つまり球形の統一性である<sup>9</sup>。

つまり、シモンドンによれば、パルメニデスはピュシスの力能、言い換えればあらゆるものを生み出す力能の存在を否定し、部分なき全体として球形の実体（スパイロス）を提示している。ここにおいて、原子論には「それ自体を中心とする一元論」としての実体論的な側面があるということが、シモンドンによって示唆されていることが明らかになる。すなわち、原子論はその端緒において、あらゆる生成消滅・転化の可能性から排除された実体のモデルに基づいて構成されていたのであり、シモンドンが原子論・実体論・原子論的実体論を批判するのはこの点においてである。

### 2.3 エピクロス派とストア派における個体-環境関係

ところで、原子論に関して、シモンドンは古代原子論のなかでも特にエピクロス派を俎上に載せているように思われる。エピクロス派によって古代原子論は部分的に変形されたのは言うまでもないことだが、この理論上の部分的変形によってシモンドンの個体化論の立場からすれば、原子論の概念構成のある問題がより際立たせられる。それは、個体間の、あるいは個体-環境の関係についての問題である。

この問題に対して、シモンドンは、エピクロス派とストア派両者の関係の概念を対比させることで説明を行っている<sup>10</sup>。(1) 第一に、エピクロス派におけるアトム間の関係について、シモンドンは、「存在のアトム間の関係は、パルメニデスの生成の否定性にとって代わる空虚を導入したことによって可能になる。

だが、その関係は真の内部性を有していない<sup>11</sup>」と批判する。エピクロス派において、アトムはわずかな方向の偏り（クリナメン）による落下運動状態に、アトム同士の衝突後には無差別な方向への運動状態にある。しかし、シモンドンが強調するように、アトム自身が何らかの力動を有しているのではない。すなわち、アトムからはあらゆる産出的な力動が排除され、合成体からは固有の統一性が排除されているので、「こうした運動とアトムである絶対的個体の実在との間にはいかなる内部性の関係 *relation d'intériorité* も存在しない<sup>12</sup>」。

詰まるところ、シモンドンによれば、エピクロス派において想定される「唯一の関係は、このあらゆる基礎的個体の、つまりアトム——デモクリトスは観念をそう呼んだ——の様々な形態上・構造上の配置なのである<sup>13</sup>」。さらに、シモンドンは次のように付記する。

[...] エピクロス派の理論において、環境 *milieu* は特異的個体を全体に従属させるものではない。というのも、環境はその固有の活動の性質を失うからである。環境はもはや空虚でしかない<sup>14</sup>。

こうして、エピクロス派では、真の個性が位置づけられる水準は人間のスケールの遥か下方に、つまりあらゆる物質の要素的単位であるアトムにあり、個体的存在に対する環境の価値は大いに減ぜられる。

(2) 第二に、ストア派の個体-コスモスの関係についても、シモンドンは「[ストア派の学説によれば、] 人間——この偉大なる身体の器官は、すべてのものリズムとの合致のなかでしか真に個体的な生を見出すことができない<sup>15</sup>」と批判する。さらに、シモンドンはこう続ける。

[...] ストア派は、共鳴において、広大なすべての魂によって活性化された環境とこの環境のただ中におけるある特異的存在との間の関係の典型を見ていた。だが、環境は、環境において宙づりにされ、環境に埋没したある特異的存在を支配する。特異的個体 *individu singulier* は、環境に対してエネルギー的には劣勢の、そして空間的には従属の状態にある。[...] 特異的個体は、力動的環境 *milieu dynamique* との関係においてしか、その個体が力動的環境を活性化する火のエネルギーの薄片を受け取った範囲においてしか、それ自体で力動を有していない<sup>16</sup>。

シモンドンによれば、ストア派においては、個体を取り巻く広大な環境との、つまりコスモスとの共鳴状態においてしか、個体はその力動を保持することができない。この点において、エピクロス派とは対照的に、ストア派における個体は環境に支配されており、個体の地位は環境に従属している。このように、ストア派は「現存するのは、あらゆる物体の総量としての全体ではなく、全体の能動的なエネルギーとしての全体であり、それ自体と交流する循環の統一性としての全体であり、この全体がストア派の理論における真の物理的個体である<sup>17)</sup>」と見ており、全体（環境、コスモス）が絶対的な物理的個体として人間のスケールの遙か上位の水準に据えられることになる<sup>18)</sup>。

原子論を始めとして、パルメニデス、そしてストア派をも支配していた「絶対的個体」観——結局のところ、それは〈スパイロス-アトム-コスモス〉の系列に収斂する——に対するシモンドンの批判は次のように約言される。

したがって、基礎的な物理的個体の探究は、古代人において不毛なままに留まっていた。なぜなら、倫理的な理由のために、その探究はあまりに独特の仕方である実体的な絶対 *un absolu substantiel* の発見を目指していたからである<sup>19)</sup>。

こうして、シモンドンは、「個体化の作用 *opération d'individuation*」の探究をいかなる倫理的な教説にも隷属させることなく、「絶対的個体」観から解放された非実体的モデルで個体-環境関係を捉えることを自身の学的要請とする。そのために、原子論的実体論における個体観は乗り越えられる必要があった。

### 3 質料形相論へのシモンドンの批判

次に、本章では、シモンドンによる質料形相論への批判の具体的な過程を精査していく。個体の概念史という観点からシモンドンがアリストテレスの質料形相論を批判するのは、主として次の2つの問題についてである。すなわち、(1) あらゆる存在の可能態に対してそれらの現実態が先行していると思なされていること、(2) 個性化されていない存在の現存が否定されていることである。

#### 3.1 「可能態に対する現実態の先行」への批判

(1) 第一に、質料形相論においてあらゆる存在の可能態に対してそれらの現実態が先行していると思なされることについて、シモンドンは、イオニア学派の

元素の理論とアリストテレスの「現実態の先行性の原理 principe de l'antériorité de l'acte<sup>20</sup>」とを対照させつつその問題点を指摘している。

アリストテレスは、イオニアの〈自然学者〉による元素の統一性の分割を保存し、固定する。もしアリストテレスの用語でピュシスを有する元素の理論を説明しようとするなら、可能態 puissance は常に現実態 acte と同時代的であるが、現実態は形相の非常に大きな多様性を認めると言う必要があるだろうに。形相に先行した、あるいは形相に後続することのできるかもしれない諸形相に関する特別で決定的な形相がないとしても、そう言う必要があるだろうに。アリストテレスにとっては、反対に論理的・時間的・実体的な意味で、現実態は可能態に先行する。可能態の存在の概念は、現実態の存在の概念を含意している。現実態の存在は、既に現実態の別の存在の影響のもとではじめて可能態の存在に由来する。可能態の存在は、現実態の存在からその本質のすべてを引き出す。現実存在は、現働的で、完全に決定された実体の形式のもとではじめて与えられる。そして、世界において現存しうる非決定 indétermination は、より完全な形相と関係することではじめて現存する<sup>21</sup>。

ここで、シモンドンはイオニア学派の元素の理論を、アリストテレスの質料形相論の術語系を用いることによって説明している<sup>22</sup>。要約すると、ここでシモンドンが述べているのは、イオニア学派において認められた現実態における形相の多様性、言い換えれば、元素に内在するピュシスの原初的な力動から派生した状態と存在の多様性が、他方でアリストテレスにおいては否定されているという事態である。

確認すると、イオニア学派におけるピュシスはシモンドンによって以下のように説明されるのだった。

個別的な存在は、その存在を構成し、状態と個別的な存在の発展の能力であるピュシスの作用に由来する物質において、原初的な元素から生じる。個別的な存在の現存と性質の起源にあるのは、原初的な元素のピュシスである。1つの個別的な存在のピュシスがあるのではなく、状態と存在に多様化した普遍的な原初的な元素のピュシスがあるのみだ<sup>23</sup>。

ここで可能態と見なされるピュシスあるいはポテンシャルは、未だ現働化さ

れていない潜在的なものではなく、「可能的なものの実在 *réalité du possible*<sup>24</sup>」である<sup>25</sup>。すなわち、シモンドンによれば、イオニア学派において、可能態は「個体化のある能動的でポジティブな力量 *une capacité active et positive d'individuation*<sup>26</sup>」であったのだ。シモンドンがILFIでアナクシマン드로スのアペイロンを称揚するのも、この点においてである<sup>27</sup>。

だが対照的に、アリストテレスにとっては、現働的なものこそが可能的なものの現働化を引き起こすのであって、その逆ではない。アリストテレスは、「何性 *quiddité*」の現存、つまり「その生起からその消失に至るまで全面的に、進展も欠損もなしに所与の存在に帰属されるもの」の現存を認めていた<sup>28</sup>。何性を有する存在は、その性質にいかなる変化も被ることなく、常に同一の本質を有する存在であり続ける。何性とは、別の言い方で言うなら、存在の永遠不変の本質であり形相であるのだが、このような存在はいかなる質的变化をも生み出さないがゆえに、「〔アリストテレスの〕個性性についての概念構成は、根本的な仕方では生成を排除した<sup>29</sup>」と、シモンドンは批判する。例えば、アリストテレスは『自然学』において、人間からは同じく人間という形相を持ったものが生まれると述べており、成長という意味での〈自然〉という語に言及する場合でも、「この意味での〈自然〉とは、まさにそれによって事物の本性が獲得されるところのものにほかならない」とする<sup>30</sup>。つまり、アリストテレスによれば、成長の過程から生じるのは、それから出発するところの質料ではなく、それへと向かうところの形相である。それゆえ、アリストテレスは、「質料よりもむしろ形相が〈自然〉である」と述べている<sup>31</sup>。しかし、このような自然観こそ、シモンドンの批判対象である。実際、シモンドンは次のように述べている。

〔アリストテレスにおける〕本質あるいは形相は、生成 *devenir* を含んでいない。実際、生成は形相を受け容れることのできる存在と形相の結合である。この可能態の存在は、質料である。現実態は、それに対応して可能態の存在が秩序づけられ、位置づけられる参照の中心 *centre de référence* である。その可能態は、本来の可能態の存在によってではなく、可能態の存在が生成できるところのものによってそのように見なされる<sup>32</sup>。

シモンドンによれば、アリストテレスにおいては、可能態の存在を秩序づけるものとしての現実態こそが参照の中心点として機能する。可能態は質料と呼

ばれるところのものに対応し、現実態は形相と呼ばれるところのものに対応するので、結局のところ、生成は (a) あらかじめ形相によって方向づけられた質料と、(b) 永続的な何性を有する形相という2つの両極的な項の結合による形相の実現という出来事にまで還元されている。あらゆる可能態は、前もって存在する現実態へと向かうのである。この点において、質料の以前に形相を置き、可能態の以前に現実態を置くアリストテレスの議論の目的論的な側面が、シモンドンによってより明瞭なかたちで浮き彫りにされている。

### 3.2 「個性化されていない存在の現存の否定」への批判——アペイロンの復権へ

(2) 第二に、質料形相論において個性化されていない存在の現存が否定されていることについて、シモンドンは次のように指摘する。すなわち、「アリストテレスは個体を常に現実態——何性の永続 *permanence de la quiddité* によって表現されるもの——と見なしているだけではなく、存在の個性化されていない部分 *une partie de l'être non individualisée* はないと考えている」のであって、詰まるところ、アリストテレスにとって「存在のすべては、個体から構成されている<sup>33</sup>」。

アリストテレスのこの見方は、場所の概念の説明にも現れている。シモンドンは、アリストテレスの『自然学』における「場所 τόπος」の概念とプラトンの『ティマイオス』における「コーラ χώρα」の概念と比較対照させることで、問題の所在を特定している。すなわち、プラトンはコーラを、「あらゆる生成の、ある意味では養い親のような受容者<sup>34</sup>」として措定し、「永遠であり、破壊の余地を残すことなく、あらゆる創造された事物にとっての座を提供し、擬似的な推理とでも呼べるものによって感覚の助けなしに理解されるようなものであり、ほとんど実在的ではないもの<sup>35</sup>」であるとしている。このプラトンの記述を踏まえううえで、以下のシモンドンの記述に目を向けよう。

プラトンは、デミウルゴスによって思考されたコスモスの摂理の秩序において宇宙全体を包含しながら、すべてを個性化し始めた。ただコーラ χώραだけが、彼の学説において存在から個性化されていないもの *le non-individualisé* をなご構成していた。[…][他方で、]アリストテレスは、『ティマイオス』のコーラ——それは、にもかかわらず現存している個性化されていないものであった——よりもまだ一貫的でないこの〔時間・場所・空虚といった〕環境を形相と本質に関係づけようと努める。場所は、ある普遍的・中立的な、個性化されていない、独立の環境ではない。アリストテレス

は、分離された絶対的実在としての無限というプラトンの説を攻撃する<sup>36</sup>。

すなわち、(a) 一方で、プラトンにおいてコーラ概念は個性化されていないもの、つまり非-個性的なものを象徴している——たとえば、その状態が著しく単純化されていようと<sup>37</sup>。(b) 他方で、アリストテレスはプラトンのこの単純化を保存するだけでなく、場所概念において、あらゆる存在から個性化されていない存在を追放している。つまり、アリストテレスにおいて、『ティマイオス』のコーラは拒絶されている<sup>38</sup>。このような経緯で、現働的なシステムにおいてすべてが個体であるという質料形相論の個体観が形成されるのである。

そして、アリストテレスはプラトンの「コーラ」に代わるものとして、「場所」を持ち出す。アリストテレスにとって、場所とは個別的な事物を包み囲むような末端面そのものなのであり、より正確に言えば「包み囲んでいるものの最も内側の部分の不動の境界面<sup>39</sup>」である。そして、場所は事物の一部を成すものではなく、「諸々の事物から打ち捨てられるものであり、そこから分離可能なもの<sup>40</sup>」である。シモンドンが、アリストテレスは個性化されていない状態を著しく単純化していると批判するのはこの点においてである。

[...] [アリストテレスの] 可能態が現実態に先立つ潜在性としての、一貫性のない見せかけの潜在性と別のものではありえないのは、すべてが個体であるからだ。可能態が合理的に λογικώς 考えられる純粋な潜在性 pure virtualité とは別のものであるためには、個性化の状態よりも以前に、現働的で個性化されていない状態 un état de non-individualisation actuelle が存在にとって可能であることが必要だった<sup>41</sup>。

ここから、シモンドンが、個体化されたものの次元に先立って「現働的で個性化されていない状態」の次元を見出していたことが明らかになる。シモンドンはこの着想をより具体的に展開するために、イオニア学派における〈自然〉の観念に依拠している。つまり、イオニア学派の概念構成によれば、世界には「個性化されていない存在の大きな備蓄 grand réserve<sup>42</sup>」があり、その典型はアナクシマンドロスによってアペイロンと名づけられた不確定なものである。周知のように、アナクシマンドロスの世界においては、あらゆる個別的な事物はアペイロンから発生して来る。そして事物はその消滅に際して、自らの不正を償うために、かつてそこからやって来たところのアペイロンへと再び回帰してゆ

く。シモンドンにとって、アペイロンによって指示されているのは、個体の発  
生に先立つ前-個体的な存在の充填量なのであって、それはまさしく存在の第一  
の相なのである。こうしてシモンドンは、ソクラテス以前の哲学、特にアナク  
シマンドロスのアペイロンの概念を経由することで、〈自然〉という語に新たな  
意味を見出している。シモンドンのこの学的姿勢は、ILFIにおける以下の記述  
においても明らかにされている。

自然という語のなかに、ソクラテス以前の哲学がその語に位置づけた意味作  
用を見出そうと努めるならば、個体がその個体とともに担っているその前-  
個体的な実在 *réalité pré-individuelle* を自然と呼ぶことができるだろう。すな  
わち、イオニアの〈自然学者〉は、個体化に先立つあらゆる存在の種の起源  
をその語に見出していた。アナクシマンドロスがそこから個体化された形相  
のすべてを生じさせたアペイロンという種のもとでは、〈自然〉は<sup>可能</sup>的<sup>な</sup>  
もの<sup>の</sup>実<sup>在</sup>なのである。すなわち、〈自然〉は〈人間〉の正反対ではなく、  
存在の第一の相である——第二の相は個体と、全体に連関して個体を補完す  
るものである環境との対立である<sup>43</sup>。

ここでシモンドンによって提示されている〈自然〉は、人間／自然あるいは  
文化／自然という二項対立のなかに回収されるようなものでは決してない。そ  
れは、存在の第一の相として前-個体的に実在し、「まだ極性化されておらず、自  
由に利用できる待機中の存在の備蓄 *réserve d'être*<sup>44</sup>」である。

シモンドンは、個体は「存在の1つの側面でしかない<sup>45</sup>」として、個体の地位  
を相対化するという一貫した主張をしているのだが、この主張はイオニア学派、  
とりわけアナクシマンドロスのアペイロンの概念から着想を得ているものであ  
ると考えられる。個体の地位を相対化するというこの着想は、シモンドンが自  
身の個体化論を練り上げるに当たって重要な役割を果たしている。詰まると  
ころ、シモンドンにとってアペイロンは、原子論的実体論においては絶対的個体  
に、そして質料形相論においては形相-質料の二項対立に回収されてしまう「個  
体化の作用を覆い隠すある曖昧な領域 *une zone obscure*<sup>46</sup>」を救い出すうえでの鍵  
概念であった。こうして、シモンドンは自身の個体化論において、「個体化の作  
用」における個体の地位の相対化を徹底して実行するため、そして個体に内在  
する個性化されていないもの——アナクシマンドロスにおけるアペイロン——の  
地位を復権させるために、「前-個体的な実在」という概念を必要としたのであ

る。

### 3.3 原子論的実体論と質料形相論に共通する問題点

最終的に、シモンドンはアリストテレスの質料形相論の問題点を次のように要約してみせる。

質料形相論の図式 *le schème hylémorphique* に従うと、〔原子論的実体論とは〕反対に、総和  $\sigma\acute{\upsilon}\nu\lambda\omicron$  に成るところの質料と形相が考えられる時には、個体化された存在はまだ与えられていない。また、常に存在発生 *ontogénèse* であるところの型取りの以前に〔観察者が〕位置づけられるから、存在発生は目撃されない。個体化の原理 *principe d'individuation* は個体化そのものにおいて作用として捉えられるのではなく、この作用が現存しうるために必要とされるもの、つまり質料と形相において捉えられる。個体化の作用 *opération d'individuation* は原理それ自体をもたらしことではなく、ただそれを利用することができることと仮定されるので、原理は質料あるいは形相のなかに含まれていると仮定される<sup>47</sup>。

結局のところ、シモンドンによれば、原子論的実体論あるいは質料形相論に従うことでは、真の存在発生を捉えることは困難である。この両学説に共通する問題点とは、「構成された個体 *l'individu constitué* に存在論的な特権 *privilège ontologique* を与える<sup>48</sup>」ということである。つまり、両学説はかたやアトム、かたや形質結合体という実体を仮定することで、「絶対的個体」を作り出していた。

ところが、シモンドンは、この両学説のような「個体という存在の確認から出発して個体化の問題を提起する方法は、解明されなければならない前提を覆い隠している<sup>49</sup>」と述べる。その前提とは、個体化が原理を持つということである。すなわち、両学説においては、「個体化の作用」の以前に「個体化の原理」なるものが想定されており、引いてはその「個体化の原理」を探究することが第一義的な目的とされる。しかしながら、「個体化の原理」から演繹的に推論されることで「個体化の作用」を捉える仕方では「個体化の作用」そのものが探究されることは決してない。シモンドンの個体化論はこの点において、両伝統的個体観と分かつた。

このようにして、シモンドンは、伝統的個体観に基づく両学説のように何ら

かの「個体化の原理」に基づいて「個体化の作用」を説明するのではなく、まさに具体的なココトイマにおいて生起している「個体化の作用」に着目して真の存在発生の力動を捉えることをその学的姿勢とする。すなわち、シモンドンの学的姿勢は、「個体に基づいて個体化を認識するというよりはむしろ、個体化を通して個体を認識する *connaître l'individu à travers l'individuation plutôt que l'individuation à partir de l'individu*<sup>50</sup>」というものである。そして、本稿で検討したように、この学的姿勢はまさに両伝統的個体観の批判的検討を通じてこそ培われたものである。

## 謝辞

本稿は平成25年度に提出した修士論文「ジルベール・シモンドンの個体化論における〈特異性・普遍性〉問題の考察— information と transduction の概念を手がかりに—」からの一部抜粋に加筆・修正を加えたものである。研究の公開が遅れましたことを関係者各位にお詫び申し上げます。また発表の場を与えてくださった比較文学比較文化研究室の大学院生有志に感謝いたします。

## 注

- 1 Gilbert Simondon, *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information*, Grenoble, Jérôme Millon, 2005. [2013].
- 2 Gilbert Simondon, « Histoire de la notion d'individu », *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information*, Grenoble, Jérôme Millon, 2005, pp. 339-502. [2013, pp. 357-520].
- 3 Ludovic Duhem, « Apeiron et physis. Simondon transducteur des présocratiques », *Cahier Simondon n°4*, Paris, L'Harmattan, 2012, pp. 33-67.
- 4 Gilbert Simondon, *Cours sur la perception (1964-1965)*, préface de Renaud Barbaras, Chatou, Éditions de la Transparence, 2005.
- 5 Ludovic Duhem, *op. cit.*, pp. 34-35.
- 6 *Ibid.*, p. 36.
- 7 HNI, p. 345 [pp. 363-364].
- 8 *Ibid.*, p. 341 [p. 359].
- 9 *Ibid.*, pp. 340-341 [pp. 358-359].
- 10 ストア派は、都市国家への社会的な関係ではなく、自己から宇宙（コスモス）——魂と実体を有する摂理的な存在への神的な関係を重視する。ストア派によれば、徳によって実現される宇宙との調和こそが善であり、それを唯一の目的として生きることがあらゆる状況において重要視される。そこに見出されるのは、ストア派の代表的な論客であるマルクス・アウレリウスによれば、「時間の全体」と「物質の全体」であり、「私が〔宇宙の〕自然に支配されている全体の1つの部分であるということ」と

「私は、同じ種に属するような他の諸部分とある意味で密接に関係しているということ」という2つの前提である。このストア派の立場は、一見して、エピクロス派の立場と対照的であるように見えるが、シモンドンによれば両者の間には共通の前提がある。Cf. Marcus Aurelius Antoninus, *Tà eis éautón*, X, 6 ; X, 17 [マルクス・アウレーリウス『自省録』 神谷恵美子訳、東京、岩波書店、1956、164頁、170頁]。

- 11 ILFI, p. 99 [p. 99].
- 12 HNI, p. 346 [p. 364].
- 13 *Ibid.*
- 14 *Ibid.*, p. 382 [p. 400].
- 15 ILFI, p. 100 [p. 100].
- 16 HNI, p. 382 [p. 400].
- 17 *Ibid.*
- 18 ここまでのシモンドンの主張は、次のように要約される。「原子論者にとって、真の個体は人間のスケール l'ordre de grandeur の遙か下方にある。ストア派にとって、真の個体は [人間のスケールの] 遙かに上方にある。」 Cf. ILFI, p. 100 [p. 100].
- 19 *Ibid.*, p. 101 [p. 101].
- 20 HNI, p. 362 [p. 380].
- 21 *Ibid.*, pp. 361-362 [p. 380].
- 22 つまり、シモンドンは、質料形相論以外の学説を説明するに当たっても、質料形相論の術語系から自由になっていないのである。
- 23 *Ibid.*, p. 340 [p. 358].
- 24 ILFI, p. 305 [p. 297].
- 25 シモンドンの議論における「潜在的なもの le virtuel」と「可能的なもの le possible」という両概念の取り扱いは、依然として興味深い問題である。というのも、この問題に関して、シモンドンとドゥルーズの視座の共通点と相違点を確認することができるだろうからだ。すなわち、ドゥルーズは魂における〈潜在的なもの—現働的なもの l'actuel〉と身体における〈可能的なもの—実在的なもの le réel〉という非常に異なる二対があるとするのに対して、シモンドンは「可能的なものの実在 *réalité du possible*」を認める立場をとっている。Cf. *Ibid.* また別の箇所、シモンドンは「ポテンシャルは、純粋な潜在性 pure virtualité である代わりに、現働的に存在する実在 réel の1つの相になる」と述べている。Cf. *Ibid.*, p. 318 [pp. 308-309]. さらに本稿注41の引用部からも、シモンドンが可能態の概念を純粋な潜在性の状態から解放しようとしていることが伺われる。Cf. HNI, p. 363 [p. 381]. これらの箇所から「潜在的なもの」よりも「可能的なもの」に優位を与えるシモンドンの指針が読み取れることは、ライプニッツに抗って単なる論理的な可能性ではなく理念の様態としての潜在性を一貫して重視したドゥルーズの指針と対照させた時、興味深いものとなる。しかし、この問題についてのより詳細な検討は、本稿の射程を大きく越えるため、別の機会に譲ることとする。Cf. Gilles Deleuze, *Le pli : Leibniz et le baroque*, Paris, Éditions de Minuit, 1988, pp. 140-141 [ジル・ドゥルーズ『襞——ライプニッツとバロック』 宇野邦一訳、東京、河出書房新社、1998、178-180頁]。
- 26 HNI, p. 362 [p. 380].
- 27 シモンドンはILFI第4部第1章(2013年版のILFIでは第2部第3章)において、アナクシマン드로スのアペイロンにおいて「存在の第一の相 la première phase de l'être」と

しての〈自然〉という観念の原型を認めている。Cf. ILFI, p. 305 [p. 297].

- 28 HNI, p. 362 [p. 380].
- 29 *Ibid.*
- 30 Aristotle, *Aristotle's physics*, a revised text with introduction and commentary by W. D. Ross, Oxford, Clarendon Press, 1955, II, 1, 193b1-10 [アリストテレス『アリストテレス全集 3——自然学』出隆・岩崎允胤訳、東京、岩波書店、1968、第2巻第1章、48頁].
- 31 *Ibid.*, 193b10-20 [同前、48-49頁].
- 32 HNI, p. 362 [p. 380].
- 33 *Ibid.*, [p. 381].
- 34 Plato, “Timaeus”, *Platonis opera vol. 4*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit Ioannes Burnet, Oxford, Clarendon Press, 1922, 49a [プラトン「ティマイオス」種山恭子訳『プラトン全集 12——ティマイオス; クリティアス』種山恭子・田之頭安彦訳、東京、岩波書店、1975、75頁].
- 35 *Ibid.*, 52a-b [同前、84頁].
- 36 HNI, pp. 363-364 [p. 381-382].
- 37 デリダは、プラトンのコーラ概念について「接近不可能で、平然としており、「不定形 *amorphon*」で、それも常に手つかずで、根本的に擬人観を受け入れられないような処女性を備えている」ものであると述べている。言い換えれば、デリダは、叡智的でも感性的でもなく、存在でも無でもないような「第三の類 *triton genos*」に属するものとしてコーラを想定しているのだが、これはシモンドンがコーラを個性化されていないものの残滓と見なしている記述と照応させることが可能である。Cf. Jacques Derrida, *Khôra*, Paris, Galilée, 1993, p. 28 [ジャック・デリダ『コーラ——プラトンの場』守中高明訳、東京、未來社、2004、22頁].
- 38 HNI, p. 364 [p. 382].
- 39 Aristotle, *op. cit.*, IV, 4, 212a20-30 [アリストテレス、前掲書、第4巻第4章、138頁].
- 40 *Ibid.*, 211a1-10 [同前、132-133頁].
- 41 HNI, p. 363 [p. 381].
- 42 *Ibid.*, p. 362 [p. 381].
- 43 ILFI, p. 305 [p. 297].
- 44 *Ibid.*, p. 303 [p. 295].
- 45 HNI, p. 390 [p. 408].
- 46 ILFI, p. 24 [p. 24].
- 47 *Ibid.*
- 48 *Ibid.*, p. 23 [p. 23].
- 49 *Ibid.*
- 50 *Ibid.*, p. 24 [p. 24].